



木造ハウジングコーディネーター

連載 奮闘記

「テキストと出会えて 幸運だった」と語る (株)オープンハウス・アーキテクトの 加藤孝彰さん

他業種から建築に関して全く無知な状態で住宅業界に飛び込み新入社員の研修業務をおこなうことになったら、何をどう学べばいいだろう。今回取材をさせていただいた株式会社オープンハウス・アーキテクト(本社=東京都中野区、日高靖仁社長、1種A正会員)の人材開発部人材力化グループ係長の加藤孝彰さんのそんな悩みを軽くしてくれたのが、木造ハウジングコーディネーター資格試験のテキストだった。加藤さんは、自らの知識習得と新人研修にテキストを有効利用し、これまで多くの新入社員や中途採用の社員を育成。同社の定評ある人材育成プログラムの礎を築いてきた。また、加藤さんははじめてとなる更新講習を今年受講し、見事に合格。「時代とともに変化する技術や新しい潮流について学ぶことができる講習には意義がある」と答えてくれた。

前職では、学習塾の業界で働いていた加藤さん。しかし、しばらく働いているうちに漠然とだが将来への不安を抱くようになったという。同じ日々を繰り返すだけで、これ以上学べものがないのではないかと、そう思ったときに新しい世界へのチャレンジ精神が湧いてきたのだそう。

「住宅業界、建築業界は全くの未経験でしたから、最初は選択肢の中にありませんでした。しかし、いろいろと話を聞いてくれていた転職支援会社の方から、こんな会社があるので受けてみないかといわれ、軽い気持ちでした」と加藤さん。最初に驚いたのは、同社の代表取締役社長である日高靖仁氏の熱量の高さだったという。

「この会社に入ったのは、社長の人柄に魅かれたからです。最初は圧倒されましたね。ここは多分普通の会社ではないんだろうと思いました。もちろん、いい意味ですが(笑)。いろいろなしなみがあったり階級主義が残っていたりする会社は多いと思いますが、この会社はそうではない。やりがいがあると感じたんです」

そうして加藤さんは2017年の4月にオープンハウス・アーキテクトに入社。イメージした通り風通しのいい社風の中で、忙しい日々を過ごしている。

建築のことを何も知らない状態で 新入社員の研修を行うことに

「新入社員の研修業務を行うということで入社しましたが、正直いって建築や住宅については完全な素人でした。そのような自分が研修業務を行うのは不安でしたし、すぐに建築業界の高くて厚い壁に当たりました。それが建築に関する知識なんですけど、何をどこまで知ればいいのか全くわからないというのが難しかったですね。しかも数ヶ月後には研修を始めなければいけないという状態で、非常に焦っていました」と当時を振り返る加藤さん。学ぶ意欲は大いにあったが、何を教科書にして学べばいいのかがわからないのが辛かったそう。

しかし、そんなときに当時の営業部の人から教えてもらったのが、木造ハウジングコーディネーター資格試験の存在だった。当時見たのは古いテキストだったが、それでも読んですぐに「これは役立つ」と感じたという。

その後、木造ハウジングコーディネーター資格試験のテキストに加えて市販のテキストも買い漁って読み込んだ加藤さん。徐々に知識が身につく、研修業務の内容をブラッシュアップしていくことができたという。ちなみに、当時研修を受けた側の人によると、当時加藤さんが「建築のど

素人」だとは夢にも思わず、あとで聞いて非常に驚いたそう。

「今の研修内容は、本当にゼロの状態からひとつずつつくり上げてきたものです。無知だった私が人に建築を教えなくてはならないとなったときに、木造ハウジングコーディネーターのテキストに出会えたことは本当に幸運でした」と加藤さん。このとき一生懸命に学んだことは、いまの研修内容にも存分に活かされているという。

最新の情報を学べてありがたかった 木造ハウジングコーディネーター更新講習

もちろん、加藤さん自身も2018年に木造ハウジングコーディネーター資格試験を受験し合格を果たしている。また、今年も更新講習も受講した。

木造ハウジングコーディネーターの資格は、資格取得後、初回が3年後、それ以降は5年ごとに更新が必要となる。加藤さんにとってはじめての更新試験だったが、どういった形式で行われるかがわからず「少しドキドキしました」というが、結果は見事に合格。満点ではなかったことが少し残念だったようだ。

「今回の更新講習では最新情報がデータになっていたのでも見やすく、勉強になりました。最新の情報をひとつひとつ自分でチェックして学ぼうとする人は多くないと思いますが、こうやって講習や試験を受けることで世の中の流れの変化にも対応でき、非常にありがたいです。それに更新講習の料金は3000円ですが、こんな立派なテキストまでいただけるなんてお得ではないでしょうか」

ここで、これまで木造ハウジングコーディネーター資格試験を受験する新入社員と多く接してきた加藤さんに、資格試験についての要望もうかがってみた。

「そうですね。木造ハウジングコーディネーター資格試験が非常にいいと思うのは、非建築系の方に対してわかりやすく知識を網羅的に載せてくださっているところだと思います。ですがその前段階、本当に建築に関して何も知らない文系の人に向けた内容のもっとやさしい建築書があると、教える側としてはうれしいですね。あとは問題集をデジタル化していただくと、通勤などにスマートフォンで見ることができていいと思います」

会社の全員が前を向いて 仕事ができる環境をつくりたい

数年前の加藤さんの1日のスケジュールはこうだ。入社後、最初にその日の研修業務の段取りを再確認。

抜けや誤りがないか、やっておかなければいけないことがないかを入念に確かめたうえで、研修で使う機材や資料のセッティングに取り掛かる。そして、準備ができれば研修をスタート。用意した資料を見ながら自ら講習を行う。

18時までの講習後は翌日の準備。ときには夜遅くまで仕事が続くこともあったようである。

「最初は研修業務を1人でやっていたので、正直大変でした。資料の準備などがぎりぎりになってしまうことも多くあり、迷惑をかけてしまったこともあります。そこは反省材料ですね。でも、いまは部署に人が増えたので、しっかりと対応できていると思います。現在は、自分は新人の研修ではなく中途採用の方の研修を主に行っています」

中途採用の方への研修は新人研修とはまた違う難しさがあるという加藤さん。その人の性格を把握することが必要で、「自分自身で自覚できるように」一人一人に合わせた言い方で、現場に出る前に覚えてほしいことや伝えるべき部分をソフトに伝えているという。

最後に、これからの目標を聞いてみると、今後の研修体制のさらなるブラッシュアップだと答えてくれた。

「この会社で今後仕事をしていく人が、不安やストレスを感じることなく前に向かって邁進していける環境を整備していきたいと思っています。研修については、もちろん自分自身にも足りていない部分がたくさんありますが、それぞれの人が伸ばしたいところをしっかりとバックアップしていきたいと思っています」と加藤さん。加えて「プライベートでの目標は、無病息災。最近は食事の栄養バランスを考えて自分で料理をするようになりましたし、お酒も控えるようになりました」と笑顔で話してくれた。

